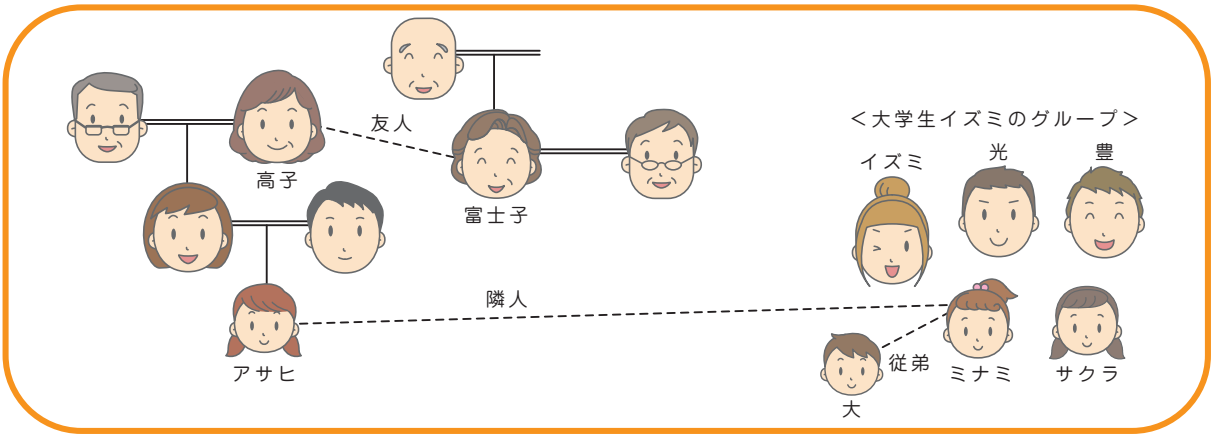
近未来ストーリー　『新しい成熟都市・練馬』

近未来ストーリーの登場人物〔名前は、練馬区の地名にちなんでいます。〕



1　三世代同居・高子一家の休日

■退職後の夫は“農”に目覚め

“あッ”と思って高子は目を覚ました。今日は日曜日、友人富士子と約束があるのだ。区内の農産物や農産物を使ったお菓子などが販売される“ねりマルシェ”が行われる。富士子は、区内のブルーベリーなどを使ったお菓子を「ねりマルシェ」に出すというので、高子も手伝いに行くのだ。

高子が朝食をつくっていると、２階に同居している娘夫婦の小学生の娘、アサヒが下に降りてきた。高子は孫娘用に絹さや入りオムレツの量を二人分に増やした。

絹さやは高子の夫が庭の家庭菜園でつくったもので、農薬を使わず、味も濃い。

練馬区は 23 区のなかで農地が一番多い。以前は相続などで農地が減少していたが、都市農地の役割が見直されて、農地を保全できる制度が整っている。夫は退職後「これからは“農”の時代だ」と言い出して、「練馬区農の学校」で勉強して区内の農家を手伝っている。勉強した内容を実践するために、せっせと家でも野菜をつくってくれる。

■若い夫婦はポタリングで地元発見

「ママたちは、今日はどうするの？」

「パパとママは、ポタリングに行くって」

練馬区は平たんな地形を活かして、自転車による散策コースを設定し、シェアサイクル・ステーションも増やしたから、娘夫婦は最近ポタリング（自転車によるまち巡り）にはまって、暇があると区内探索に出かけるようになった。区の西側に南北の道路もできたし、西武新宿線は鉄道が立体化され、

上石神井駅付近の踏切もなくなった。駅前も見違えるようだ。そういえば、最近できた道路は電柱がなくて歩道が広く、街路樹も素敵な雰囲気で、とても歩きやすい。歩いてまち巡りをするのも楽しみになってきた。

■商店街が元気になってきた

「アサヒちゃんは一緒に行かないの？」

「今日はお隣のミナミお姉ちゃんが、従弟の大ちゃんと一緒に、商店街の謎解きゲームに連れて行ってくれるから、別行動」

「謎解きゲームって、前にも行ったんじゃない？」高子は聞いた。商店街の人たちが、商店街の歴史や店で売っている商品を題材にして、謎を解きながら、まちを歩くゲームをつくったことは、以前から知っていた。

「今日のは新作だよ。英語版も用意してあるんだって。中学生のお兄さんやお姉さんたちも、ボランティアで参加しているよ。仮装したキャラクターも街角のあちこちに登場するから、よそからも沢山お客さんが来るんだよ。早く行かないと…」

商店街も楽しくなってきた。先日、近くの商店主が「おいしい紅茶のいれ方」を教える「まちゼミ」に高子も顔を出したことがある。「まちゼミ」の内容も、魚のさばき方とか、フランス語メニューによるフレンチ料理の解説とか、生活系スマホアプリの実演紹介とか、種類がどんどん増えてくるから、しばしば商店街に足が向くようになり、買い物も楽しんでいる。

■ライフスタイルにあわせた子育て

「大ちゃん、この前まで赤ちゃんだと思ってたけど」

「大ちゃんは、練馬こども園の年長さんだよ」

自分たちが子育てしていたころに比べたら、子育て支援が出産前から就学時期まで切れ目なく充実して、今のパパママ世代は本当に恵まれているなあと、高子は思う。娘を産んだ頃は保育園の待機児童が多く、幼稚園と保育園は別の制度だった。高子と夫は共働きで、娘を保育園に入れられず苦労した。ようやく認証保育所に入れたと思ったら 2 歳までしか預かってもらえず、3 歳になったときの預け先を探さなければならない…「3 歳の壁」もあった。小学校入学以降も、学年が上がると学童クラブに入れなくなり、娘の放課後が心配だったものだ。

今は、保育園も幼稚園も「練馬こども園」になり、分かりやすく利用しやすい仕組みになった。待機児童もいなくなった。

家庭で子育てしたい親たちが、一時的に子どもを預ける仕組みも充実していて、仕事を続けたい親も、家庭で子育てしたい親も、希望する子育て支援の選択肢が増えて、喜ばれている。

小学生の放課後の過ごし方も充実し、各学校の「ねりっこクラブ」で、親が働いている子も働いていない子も、一緒に楽しんで放課後を過ごしている。

■都心にも近いし、みどりも多く、練馬がいい

娘夫婦は結婚当初は隣県のアパートにいたのだが、“練馬は都心に行くのも便利で、地方に行くにも関越の入り口がある。みどりも多いし、やっぱり練馬に住みたい”と戻ってきた。

戻った当初は、実家近くの賃貸マンションに住んでいたが、数年前に一緒に資金を出して家を改築して二世代同居することになった。

改築の際には、できる限りスマートハウスに近づけた。家電など外出先から操作できるし、家事ロボットも使っている。屋根の太陽光パネルで発電した電気は、車庫の電気自動車に蓄電している。

もっとも電気自動車はまもなく、水素を活用した燃料電池自動車に買い替える予定だ。練馬区にも水素ステーションが増えてきたからだ。

2　富士子一家の高齢二世代暮らし

■住宅もまちも環境負荷が少なく、安全がいい

富士子と夫は、子どもたちが独立して退職した後、富士子の父親を引き取って介護するために練馬区のマンションに移り住んだ。住宅もまちも環境負荷が少ない方がいい、広々とした自然が身近にあるといいなぁと考えていたところ、みどり豊かな練馬区にコジェネレーション（熱電併給システム）を取り入れたマンションができると聞いて、このマンションを選んだ。大江戸線が延伸されて駅が近いこと、広い道路が整備され道路沿いの建物は耐震化されているなど、まちの利便性と安全性もポイントになった。転居後、第 2 の人生を踏み出そうと女性向け創業セミナーに参加し、そこで知りあった仲間が始めた、練馬産の農産物を使うお菓子が人気の店を手伝っている。

■在宅療養・介護を支えるネットワーク

富士子は今、持病がある 90 歳の父親を在宅介護している。時に父親を病院に入院させたり、退院後に地域の医師と相談しながら、在宅で療養できるようにしたりと忙しい。今は区内の病床数も増え、病院と地域医院が連携して診てもらえる。介護の事業所、訪問看護事業所など、父のための医療・介護連携チームができていて、安心して在宅介護ができるようになった。

■障害がある人も安心して暮らせる

富士子は、現役のころ、障害がある人の就労支援事業所で働いていた。夫とは、夫の会社が職場体験を受け入れてくれたときに知り合ったのだ。引っ越して来てから、練馬区での就労支援の状況を聞いてみたら、職場体験を受け入れてもらえる事業所が増え、そのあと雇用につながるケースも徐々に増加しているそうだ。重度の人のグループホームもできて、地域で障害がある人が暮らし続ける環境が少しずつ整ってきている。

■高齢者の交流と健康づくりの場が身近に

富士子の夫がマンションの管理組合の打ち合わせから帰ってきた。

「お帰りなさい。今日と明日は私、明後日“ねりマルシェ”に出すお菓子作りがあるからお店に出かけるわ。」

「うん、今日俺は友達と“街かどケアカフェ“で"ロコモ体操“。明後日の“ねりマルシェ”には俺も、お義父さんと一緒に寄ってみるよ」

富士子も夫も、近所にある高齢者の交流と相談の場“街かどケアカフェ“にときどき立ち寄り、健康相談や体操をしたり、近所の住民とのおしゃべりを楽しんだりしている。ここでできた新しい友人と一緒に、ボランティア活動も始めた。

■災害時の対策と日常の見守り

富士子の夫は、いざというときに義父と一緒に避難するには、マンションの人たちの助けが必要だと考え、マンションの防災グループに参加することにした。

防災グループではこんな話し合いをしている。

「建物は耐震化していて安全でも、部屋の中でけがをしたり、ショックで動けない高齢者も出るかもしれない。どんな人が住んでいるのかわからなかったら、助けようにも助けられない。」

防災グループのメンバーは、練馬区の防災カレッジの講習を受け、マンション防災に先進的に取り組んでいる管理組合の事例や、地域の町会の防災会の取組の情報も入手した。今、マンション独自の安否確認の仕組みをつくっている。

「災害時のことだけ考えるのではなく、日頃から、声を掛け合える関係づくりをしよう」

この地域では、町会、商店会、PTA、民生児童委員、老人クラブとか、地域のさまざまな団体、それに宅配業者さんみたいにお家を訪ねる事業者も、連携して、高齢者など援護が必要な人の日常を見守るネットワークをつくっている。

マンションの管理組合も、見守りのネットワークに参加することになった。

3　大学生イズミたちの挑戦

■区内３大学の合同学園祭

イズミは北関東の育ちで、練馬区にある大学の芸術学部に入学した。区内３大学が一緒になって学園祭をやる「江古田カレッジトライアングル」に参加して、驚いた。練馬区が意外に面白いまちだということだ。

きっかけは、練馬育ちの友人ミナミに、学園祭で創作芝居をやらないかと誘われたことだ。「シナリオ書いてよ。作家志望なんでしょ」

仲間に、ミナミと同じく練馬で育ち経済学部で信金就職志望の光、芸術学部で漫画家志望の豊、その友達で音大バイオリン専攻のサクラと、３大学の物好きが集まった。練馬育ちが２人、それ以外が３人という構成だ。

■練馬って、なかなか、いけてるじゃん

題材は光の提案で、まちおこしにからんだコメディにした。

「20 世紀は世界に打って出ることが主流だったけど、21 世紀は、『地元愛』だ。大学が練馬にあるんだから、地元を知れば、きっと面白いものができる」。

そこで、みんなでポタリングで区内を巡ってみて、多彩なまちの魅力に驚いた。商店街の個性的なお店、街全体がみどりでつながる住宅地、農地や樹林地のある風景、東京の新たな賑わいスポットとなった公園…。地元愛にアツい農業者や商店主の人たちの話も、面白い。

そうして創った芝居のタイトルは、「練馬って、なかなか、いけてるじゃん」。農業者や商店主たち、また行政職員が、それぞれの専門性を発揮して、まちおこしに取り組む活劇コメディだ。大根や馬や照姫やねり丸が登場して、笑わせて、

泣かせて、予想以上に好評だった。
　上演後、練馬の活性化に取り組む異業種交流会の会長が訪ねてきた。
　「大学生もまちの異業種ってことで、練馬活性化のアイデア出しに参加してくれないか？」ということだった。イズミたちは、待ってましたと OK した。

■地域デビューが始まる
　イズミたちは練馬区という舞台を得て、そこに暮らす区民と知り合いになった。もしかして、自分たちが編み出したアイデアが、まちの役に立てるかもしれない。
　人々の出会いの場所がいろいろあるまち、大学生にそういう場を提供してくれるまちって、なかなか素敵だ。
　「練馬区で地域デビューするなんて、これもご縁かもね」